

テツ・アートプラザ開館にあたって

哲文化創造公益財団法人 理事長 福田 三千男

ただいまご紹介にあずかりました福田でございます。本日は、お忙しい中、テツ・アートプラザの開館式典にご臨席を賜わりまして誠にありがとうございます。

こうして無事に立派にこのアートプラザが完成する事が出来たのも、ひとえにここにお集まり頂いている皆様のご協力があり出来たものと思っております。改めて感謝申し上げます。

この建物は 1909 年、明治 42 年に川崎銀行の水戸支店として建設された本格的な洋風建築です。1945 年の空襲で外壁と金庫を残して消失しましたが、戦後に鉄筋コンクリートで改修され、2019 年まで三菱UFJ 銀行水戸支店として使われていました。

私は、この向かいの現在はアダストリア水戸本店があるところにあった実家で高校卒業まで暮らしていましたので、この場所は子どもの頃の遊び場でした。

今回ここに施設を整備するにあたり、私の子供時代の思い出の場所でもある、この歴史的な建物を出来る限り生かして利用することを考え、外壁はそっくり残し、廻りの塀に使われていた明治時代のレンガは内部の壁に積み上げました。また隣のカフェとの通路は建物のレンガの躯体が見えるようにし、東側の外壁はカフェの壁として取り込みました。このホールの東西に新築したカフェと美術館の外壁には、対候性に優れたレンガを活用し、周辺になじみやすく表情豊かで 100 年経っても使用できる長寿命な建物となりました。

このホールはコミュニティスペースとして利用します。核家族化や個人の価値観の多様性などによって、人と人との繋がりや交流そして地域の絆などがどんどん希薄になっていることや、水戸のまちに活気がなくなっていることを私はとても心配していることから、まちに賑わいをとりもどすために芸術館や茨城ロボッツ、水戸ホーリーホックなどへの支援を続けています。

そういう考えの中で、会社が 2023 年に創業 70 周年、2024 年に東証一部上場 20 周年を迎えるのを機に、さらに地域に貢献したいという思いで、水戸における文化創造とコミュニティ復活への取り組みとして、この施設とそれを運営する財団を設

立いたしました。施設は、シルクロードから中国、韓国の古美術の優品から成る吉田光男さんのコレクションが1階に、私が収集した近現代の日本美術を中心とした展示室が2階にある美術館、明るく開放的なカフェそしてこのホールで構成され、ホールと美術館は所在地の泉町にちなみドイツ語の「クヴェレー泉」と名付けました。泉に人が集まるように、この施設が広く交流が生まれるオアシスとなるようお願いもこめました。

ご承知のように水戸には弘道館と偕楽園があります。当時日本最大規模の藩校であった弘道館で学び疲れた心身を、偕楽園で休ませリフレッシュさせるいわゆる「一張一弛」の役割を2つの施設は持っていました。このテツ・アートプラザは、美術館で作品を鑑賞することによって美術の歴史、技芸や作家の信念、感情などを学び、カフェやコミュニティスペースで心身をリフレッシュできる正に「一張一弛」のところとなります。

私はコミュニティ復活を強く願い、優れた美術作品は人の精神を豊かにできるという思いでテツ・アートプラザをつくり、そして「まちにいきる」「歴史を感じる」「生活を楽しむ」の3つの方針で運営することによって、一昨年開館した水戸市民会館と芸術館、水戸京成百貨店から成るミトリオ地区ばかりではなく水戸市にとってダイヤモンドのような存在にこのテツ・アートプラザがなっていると思っています。

1953年、私の父である福田哲三が「株式会社福田屋洋服店」を設立しました。以来、哲三が大事にしてきた言葉である、「なくてはならぬ人となれ なくてはならぬ企業であれ」を信念に、私は企業経営に精進してまいりました。

その大きな成果として、本日このテツ・アートプラザの開館を迎える事ができましたことに大きな感慨を覚えています。

このようなことを実現できましたのも、これまで私を支えてくれました多くの皆様方のお陰だと心より感謝申し上げます。

今後ともこれまで同様のご支援をお願いいたしまして私のご挨拶とさせていただきます。

付 開館式典における福田三千男理事長の挨拶原稿をまとめたものです。